

歩行開始期幼児の反抗・自己主張への母親の 対応をめぐる経年変化：

2000 年と 2020 年の質問紙調査の結果の比較

Changes in mothers' responses to their toddlers' defiance and self-assertion:

A comparison of the results of questionnaire surveys in
2000 and 2020.

坂上 裕子

Hiroko SAKAGAMI

問題と目的

歩行開始期にあたる1歳後半から2歳前半にかけては一般的に、子どもの反抗や自己主張が強くなり、多くの親がわが子との関わりに大変さを覚えるようになる。この時期は、「第一次反抗期」あるいは最近では「イヤイヤ期」と呼ばれるが、「反抗期」や「イヤイヤ期」という俗称は、子どもの行動特徴を大人の視点から捉えた場合の呼称であり、この年代の子どもの発達的な特徴を的確に表した呼称であるとは言い難い。本論では、子どもが他者や物との関わりの中で、自らの主体性を確認していくことがこの年代の発達の本質的な特徴であることを踏まえ、「自己確認期」（坂上, 2018）という表現を用いることとする。

この時期は、子どもの自律性や自己制御の発達、ならびに親子の関係性の発達において、重要な意味をもっている。Emde & Bachsbaum (1990) は、親とのつながりを維持しつつ自律性を獲得すること (autonomy with connectedness) が、歩行開始期の課題であると述べている。自律性の増大に伴い、子どもは意図的な反抗や強い自己主張を親に向けるようになるが、一方では言語や認知に関わる諸スキルの獲得にともない、親とのつながりを維持するための新たな方法を身につけていく。また、より多くの基準やルールを学ぶにともない、子どもは親から課された基準を内在化し、それらの基準に沿った行動を自然に取るようになる (Forman, 2007)。Bowlby (1969) は、3歳頃に形成される親子の新たな関係性のあり方を、パートナーシップ（協調性）に基づく関係性と呼んでいる。パートナーシップに基づく関係性とは、二者が互いに目標や計画を調節することを経て共通の目標を見出し、それを達成するための共同の計画に参加することによって、双方が共通の目標

の達成という報酬を手にする関係性のことをいう。以上のように、「自己確認期」に重なる歩行開始期は、乳児期に形成されたアタッチメント関係を土台に、自己の意図と相手の意図の対立を巡る行動上の衝突や内的な葛藤を経て、親子の間で互惠的、相互調整的な関係性が築かれていく、親子関係の質的な転換期にあたる(坂上, 2005)。

この時期に形成される、互惠的で相互調整的な親子の関係性は、子どもの成熟的要因によってのみでなく、わが子の発達の変化に応じた関わり方を模索し、身につけようとする、親の側の努力があって初めて実現しうるものである。この時期に親は、子どもに対する本格的なしつけを開始し(Gralinsky & Kopp, 1993), 子どものアタッチメントの対象としてだけでなく、社会化の担い手としての自身の役割を自覚化するようになる(坂上, 2005; 菅野・岡本・青木ほか, 2009)。親による、子どもの社会化の担い手としての関わりは、子どもが乳児の時から既に始まってはいるが、その相対的な必要性や重要性は、子どもの行動範囲が広がる歩行開始期に増すことになる。そして、親には、子どもの行動に制限を課すことと、子どもの自律的な行動を促すことの、相容れない二つのことが求められるようになる(Verhoeven, van Baar, & Deković, 2019)。この時期に親が、子どもの要求に対して敏感(sensitive)に応答し、穏やかでいながらしっかりとした制限を子どもの行動に課すことによって、子どもは様々な社会的規範や親の価値観を内在化し、適度な自律性や自己制御を身につけることができる(Andreadakis, Joussemet, & Mageau, 2019; Kochanska, Aksan, Prisco, & Adams, 2008など)。

歩行開始期に生じる親の関わりの変化については、いくつかの先行研究で実証的な検討が行われてきた。たとえば、Kuczynski, Kochanska, Radke-Yarrow, & Brown (1987) は、1歳半～3歳半の子どもの母親が用いる統制方略の自然観察を行い、子どもの加齢にともない、非言語的な統制や注意統制は減少し、直接的な非難や説明、交換条件が増加したことを報告している。また、子どもの言語能力や認知能力の出現を受けて、親は帰納的なしつけ(子どもにルールを確認させる、子ども自身に考えさせる)の使用を増やしていく(Verhoeven, Junger, Van Aken, Deković, & Van Aken, 2007)ことも明らかにされている。

日本国内の研究としては、坂上(2002; 2005)による研究がある。坂上(2002)は、一母子の日常生活場面の自然観察から、生後15～27ヵ月齢の間に、子どもの理解力が向上したり子どもの要求・拒否表現が分化したりすることにもない、交換条件を出す、強い口調で非難するなど、子どもの側に理解や譲歩を求める様々な対応を母親がとるようになったことを報告している。

また、坂上(2003)は、生後18～30ヵ月齢の子どもをもつ母親270人を対象に質問紙調査を行い、子どもの反抗や自己主張に対する母親の対応の実態と、子どもの月齢による母親の対応の頻度の違いを検討している。この調査の結果によれば、子どもが言うことを聞かなかったり自分の思い通りにならなくてぐずったりする時に母親がよくとっていたのは、抱っこをしたり抱きしめたりする、ほめてのせる、共感の言葉をかけるといった、子どもの気持ちに寄り添うような対応であった。続いて母親が相対的によくとっていたのは、他の物事に気を引くなどの、子どもの注意をそらす対応であった。一方、大声で怒る、叱る、放っておくなどの強圧的な対応や、理由や状況を説明して言い聞かせる、「～したら～してもいいよ」と交換条件を示すといった、子どもに理解や譲歩を求め

る対応は、上述の対応ほどは頻繁にとられないことが分かった。さらに、これらの対応を母親がとる頻度は子どもの月齢によって異なっており、2歳前半（25～30ヵ月齢）の子どもをもつ母親は、1歳後半（18ヵ月～24ヵ月齢）の子どもをもつ母親に比べ、子どもに理解・譲歩を求める対応や強圧的な対応をより頻繁にとっていることが明らかとなった。以上の先行研究の結果は、親による共感的な関わりを基盤としながら、親の側が、親の意図や感情に焦点化した対応や子どもに理解や譲歩を求める対応をとるようになることで、親子の関係性がより相互調整的で対等なものへと変容することを示唆している。

ところで、「自己確認期」にある子どもの反抗や自己主張への親の対応に焦点を当てることは、親としての発達過程に関する理解を深めることにも繋がる。この年代の子どもを持つ親は、わが子の反抗や自己主張を前にして、思うように物事が運ばないことへの苛立ちや困惑を経験する（Verhoeven, et al., 2019）。そして、自身の感情への対処や子どもの行動への対処を迫られる結果、わが子の行動の意味や自身の対応の仕方を見直すことを経て、新たな物の見方を身につけたり、わが子の発達状態や個性に応じた新たな関わり方を身につけたりするようになる。こうした過程を経て親は親としての成長や発達を遂げていく（坂上, 2005; 高濱・渡辺・坂上ほか, 2008）。

親としての成長や発達は、子どもとの日々の関わりの積み重ねのうえに成し遂げられるものであるが、その土台には、親自身が育てられた経験や、親になる前に幼い子どもの世話をした経験など、自身の養育にかかわる経験がある。また、親として成長、発達していく過程は、親子を取り巻く社会的環境の影響を少なからず受けている（氏家, 2001）。現在、幼児をもつ親の世代の人たちが生まれたのは、日本の少子化対策が本格化される契機となった1.57ショックの前後の時代にあたる。現在、親になったばかりの人たちや、これから親になる人たちの中には、幼い子どもの世話をしたり幼い子どもと遊んだりした経験がほとんどないままわが子を授かり、子どもの育ちや子育てに関する実体験に基づく知識が乏しい状態で、初めての育児にのぞむことになる人が少なくない。

こうした現状を裏づけるかのように、ベネッセ教育総合研究所（2016）が2000年から5年ごとに実施している、乳幼児をもつ親への調査によれば、母親の子育てへの肯定的感情は高いまま推移しているものの、「自分の子どもは結構うまく育っていると思うこと」という質問に「よくある」「ときどきある」と回答した母親の割合は15年の間に5%ほど低下しており（2000年 81.7%→2015年 75.4%）、子どもの発達に関する不安が若干高まっていることが報告されている。また、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」に「よくある」「ときどきある」と回答した母親の割合も5%ほど増加しており（2000年 59.6%→2015年 65.7%）、漠然とした不安を抱えながら子どもを育てている母親が増加傾向にあることがうかがえる。

また、上記の内容に関連して、低い年齢の子どもをもつ親の多くが育児の情報源として利用しているのが、インターネットやSNSといった電子ツールである。ベネッセ教育研究所（2016）の調査によれば、1歳6か月～3歳11か月の子どものもつ母親の約7割がしつけや教育の情報源としてインターネットやブログを利用しており、その割合は、園の先生（ただし、保育園児の親のみ）や母親の友人・知人と同程度に高いことが示されている。また、インターネットの検索エンジンに「イヤイヤ期」という語を入力すると、Google検索では約 1,970,000 件、Yahoo検索では約3,320,000件

ものの結果がヒットし、検索時には他の候補語として、「イヤイヤ期 いつから」「イヤイヤ期対応」「イヤイヤ期 なぜ」「イヤイヤ期 いつまで」「イヤイヤ期 イライラ」といった言葉も表示される(2021年11月10日に検索)。このことから、自己確認期にある子どもの特徴や子どもへの対応に高い関心が向けられていることがうかがわれると同時に、この時期の子どもの発達や親の対応をめぐる、(提供されている情報の質はさておき)さまざまな情報が親に向けて発信されていることが分かる。

さらに、現在の育児に特徴的なこととして、地縁や血縁と切り離された状態で子育てをしている人が多いことを指摘できる。NPO法人ひろば全国連絡協議会(2015)が、全国の地域子育て支援拠点を利用する母親を対象に実施した調査によれば、72.1%の母親が、自分の育った市区町村以外で子育てをしている。このような状況下での育児は、アウェイ育児と呼ばれており、アウェイ育児をしている母親たちでは、自分が育った市区町村で子育てをしている母親たちに比べ、「子育てをしている親と知り合いたい」「子育てでつらいと感じる」「家族以外の人と交流する機会があまりない」「子育ての悩みや不安を話せる人がほしい」「近所で子どもを預かってくれる人がいない」と答えた人の割合が高いことが報告されている。親だけで子どもに向き合わないといけないことによる孤立感や育児負担感の高さは、親の育児不安や育児ストレスを高めることに繋がり、親が子どもと向き合ったり子どもとの時間を楽しんだりすることを難しくするものと考えられる。

ここまで、親子関係や親にとっての「自己確認期」の、発達の意義について論じてきたが、上述のように、親子を取り巻く環境は近年大きく変化しており、子どもの「自己確認期」への親の向き合い方にも変化が生じているものと推測される。そこで本研究では、現代における子どもの反抗・自己主張への母親の対応の実態とその特徴を、20年前(2000年)に筆者が実施した調査結果(坂上, 2003; 2005)との比較から読み解くことを試みる。同時に、「自己確認期」にある子どもをもつ親に対してどのような支援が望まれるのかを考えることとしたい。

方法

本研究では、異なるコホートを対象とした2つの調査におけるデータを分析に用いる。一つは、2000年に実施した調査(調査1)、もう一つは、2020年に実施した調査(調査2)である。各調査のデータ収集手続きと対象者の情報、ならびに質問紙の構成を以下に記す。

調査1の手続きと対象者

某育児雑誌の編集部の協力を得て、読者カードのプールから生後18カ月齢前後～30カ月齢前後の子どもの持つ読者366人(全て母親)を選定後、調査票を郵送し、297人(子どもの月齢:17～33カ月)から回答を得た(回収率81.1%)。このうち、回答に不備のあった3人と子どもの月齢が18～30カ月の範囲外だった24人の回答を除く、270人の回答を分析に使用した。

分析対象者(コホート1;以降、C1と略記)の平均年齢は31.2歳(標準偏差3.60, 範囲23～43歳)で、居住範囲は47都道府県全てであった。254人(94.1%)が専業で育児をしていた。子どもの性

別は、男127人（47.0%）、女143人（53.0%）、出生順位は、第1子182人（67.4%）（ひとりっ子155人、2人きょうだい第1子27人）、第2子81人（30.0%）（2人きょうだい第2子72人、3人きょうだい第2子9人）、第3子7人（2.6%）（3人きょうだい第3子）であった。保育園に就園している子どもは16人（5.9%）であった（詳細は、坂上（2003）を参照）。

調査2の手続きと対象者

調査会社を利用したウェブ調査を2020年10月中旬に実施した。調査1と対象者の属性を揃えるため、回答者のスクリーニングを行いながらデータの収集を行った。具体的には、生後18-24ヵ月齢、生後25-30ヵ月齢、生後31-36ヵ月齢の子どもをもつ母親を対象に、各月齢群につき、男女が同比率、第1子：第2子以降がおおよそ2：1の比率となるように、各月齢群150人の回答が集まったところでデータ収集を打ち切った。回答者の居住地域が全国に分散するようにスクリーニングを行った。調査票には不適切な回答のある回答者を除外するためのスクリーニングの手続きが調査会社によって施されている。今回の分析には、このうち、生後18～30ヵ月齢の子どもをもつ母親300人の回答を使用する。

分析対象者（コホート2：以降、C2と略記）の平均年齢は33.4歳（標準偏差4.81、範囲22～49歳）であった。159人（53%）が専業で育児をしていた。子どもの性別は、男150人（50.0%）、女150人（50.0%）であった。子どもの出生順位は、第1子180人（60%）、第2子以降120人（40%）であった。保育所や子ども園に就園している子どもは117人（39%）であった。

調査2の実施に際しては所属組織の研究倫理審査委員会による審査と承認を得た（青20-18）。

質問紙の構成

調査票には、上記フェイスシート項目の他に、①子どもが反抗や自己主張をよくする状況、②子どもの反抗・自己主張の程度、③子どもの反抗・自己主張への対応、④各対応の効果の認知、⑤育児感情、⑥子どもの発達に関する認知、を尋ねる質問が含まれた。このうち、本論文の分析で使用する、②、③、④、⑤の尺度について以下に説明を記す。

子どもの反抗・自己主張の程度に関する尺度 この時期の子どもに特徴的であると考えられる反抗や自己主張に関する10の行動を提示し、その行動が子どもにどの程度みられるかを、5件法（1まったくない、2たまにある、3時々ある、4よくある、5とてもよくある）で評定するよう求めた。提示した行動は以下のとおりである。①何かにつけ、「いや」という、②思い通りにならないと、だだをこねる、③本人がしたくないことをさせようすると、頑固に拒否する、④欲しいものが手に入らないと、泣いたり、かんしゃくをおこしたりする、⑤やろうとしていたことを誰かに先にされてしまうと、ひどく怒る、⑥自分がやりたいと思ったことに関しては、頑として譲らない、⑦やろうとしていることに手を貸そうとすると、怒る、⑧何でも自分でやってみたがる、⑨自分のやろうとしていることがうまくできないと、ぐずったり、かんしゃくをおこしたりする、⑩自分の要求を聞き入れてもらえないと、しつこく訴え続ける。

子どもの反抗・自己主張への対応に関する尺度 子どもの反抗や自己主張に対してとられうる対応を提示し、普段、子どもが言うことを聞かない時や自分の思い通りにならずにくずる時に、どのくらいの頻度で当該の対応をとることがあるかを5件法（1 まったくない、2 たまにある、3 時々ある、4 よくある、5 ととてもよくある）で評定するよう求めた。調査1では、先行研究を参照して作成した18の対応に関する質問項目を（詳細は坂上, 2005）、調査2では、調査1で使用した18の対応に新たに3つの対応を加えた21の対応に関する質問項目を使用した。本研究ではコホート間の比較を行うため、調査1、調査2で共通して使用した18項目への回答のみを分析の対象とした。提示した18の対応は次のとおりである。

共感（「～したいの」「～がいやなの」と共感の言葉をかける）、自尊心に訴える（「すごいね」「偉いね」などと誉めて乗せる）、大声で怒る（大きな声を出して怒る）、突き放す（「好きにしないで」「もう知りません」などと、突き放した態度をとる）、指示（「～しなさい」「～したらいいけません」と叱る）、叩く（手足やお尻などを叩く）、無理強い（無理にでも言うことを聞かせる）、注意をそらす（他の物事に子どもの気をひく）、DVDやテレビ（DVDやテレビを見せる）、飲食物（好きな食べ物（お菓子を含む）や飲み物を与える）、待つ（子どもがその気になるのを待つ）、説諭（理由や状況を説明して言い聞かせる）、交換条件（交換条件（「～したら〇〇してもいいよ・してあげる」など）を出す）、脅し（子どもが苦手な物やいやなことで脅す）、アイデンティティに訴える（「もう赤ちゃんじゃないよね」「おにいさん（おねえさん）は～ですよ」などと言い聞かせる）、物事でつる（子どもの好きな物事でつる）、抱っこ（抱っこをしたり、抱きしめたりする）、放置（しばらくそのまま放っておく）

対応の効果に関する尺度 子どもに言うことを聞かせたり子どもを落ち着かせたりする上で、上記の18の対応はどの程度効果があると思うかを、4件法（1 かえって逆効果になる、2 あまり効果はない、3 少し効果がある、4 効果がある）で評定するよう求めた。

育児感情尺度 この年代の子どもをもつ母親が、日々の子どものやりとりに際して、あるいは子どもに対して日頃有している感情を測定するため、著者が作成した15項目（詳細は坂上, 2005）を提示し、各項目が自身にどの程度あてはまるかを、5件法（1 あてはまらない、2 あまりあてはまらない、3 少しあてはまる、4 よくあてはまる、5 ととてもよくあてはまる）で評定するよう求めた。

分析には、IBM SPSS Statics version 27を用いた¹。

結果

尺度の構造の確認

はじめに、コホートごとに各尺度の項目を用いて探索的因子分析を行い、尺度の構造の確認を行った。分析には、各項目の評定値をその項目の得点として使用した。

子どもの反抗・自己主張の程度に関する尺度 10項目を使用して探索的因子分析（主因子法）を行った。固有値の減衰パターンと解釈可能性を考慮して、C1、C2ともに因子数を1とするのが適当であると判断した。いずれのコホートでも因子負荷量が.35を下回る項目はなく、内的整合性が高いことが確認された（C1： $\alpha = .87$ ，C2： $\alpha = .92$ ）。そこで、10項目の評定値の加算平均を反抗・自己主張尺度の得点とし、コホート間の得点比較に用いることとした。

子どもの反抗・自己主張への対応に関する尺度 18項目の評定値を使用して、コホートごとに探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、C1では、固有値の推移が3.62, 2.47, 1.65, 1.42, 1.15, …であり、因子の解釈可能性も考慮した結果、4因子とするのが適当であると判断した。一方、C2では、固有値の推移が4.48, 2.88, 1.59, 1.11, 0.91であったことから、因子数を3に指定した場合と4に指定した場合の結果を比較し、各項目の因子負荷量や解釈可能性から、3因子とするのが適当であると判断した。これより、子どもの反抗・自己主張への母親の対応の因子構造は両コホートで異なると考えられたため、対応の頻度については、個別の対応ごとにコホート間の得点比較を行うこととした。

子どもの反抗・自己主張への対応の効果に関する尺度 対応の効果の認知に関する18項目の評定値を使用して、コホートごとに探索的因子分析を行った。その結果、対応の頻度と同様に、両コホートで因子構造が異なると判断されたことから、対応の効果についても個別の対応ごとにコホート間の得点の比較を行うこととした。

育児感情尺度 育児感情に関する15項目について、コホートごとに探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。固有値の減衰パターン（C1では5.15, 2.05, 1.77, 0.84…；C2では5.17, 2.56, 2.11, 0.81…）と解釈可能性を考慮して、C1、C2ともに因子数を3とするのが適当であると判断した。それぞれのコホートで抽出された各因子は、すべて同じ項目で構成された。因子分析の結果を、Table 1に示す。

第1因子は、子どもの反抗や自己主張が強いこの時期ならではの親の苛立ちや困惑に関する項目を中心に構成されていることから、「否定的感情」と命名した。第2因子は、子どもの成長の姿や子どもとのやりとりに対する肯定的感情を扱った項目を中心に構成されていることから、「肯定的感情」と命名した。第3因子は、子どもが過度に従順であることや、子どもの反抗や自己主張の少なさへの不安を扱った項目を中心に構成されていることから、「不安」と命名した。各因子にもっとも負荷量が高い項目の評定値の加算平均をその因子の尺度得点とし、コホート間の得点比較に使用することとした。

Table 1 母親の育児感情 因子分析の結果

項目内容	コホート1 (2000年)			コホート2 (2020年)		
	I	II	III	I	II	III
	<i>a</i> =.86	<i>a</i> =.82	<i>a</i> =.70	<i>a</i> =.88	<i>a</i> =.88	<i>a</i> =.78
子どもが言うことを聞かないので、いらいらする時がある	.81	.09	.01	.82	.10	-.14
子どもを扱うのが大変だと感じる	.68	-.06	-.06	.79	.01	-.06
子どもに対して感情的になってしまうことがある	.72	.05	.08	.74	.01	.00
子どもの「いやいや」「じぶんで」にうんざりすることがある	.83	.11	-.07	.73	.04	.09
子どもの「イヤ」や「じぶんで」がいつまで続くのだろう、とうんざりすることがある	.63	-.11	-.07	.70	-.07	.09
子どもと一緒にいるのがいやになる時がある	.60	-.30	.05	.67	-.25	.06
自分は子どもをきちんとしつけられていないのではないかと心配に思うことがある	.46	.00	.13	.55	.13	.07
子どもの成長がたのもしく感じられる	.02	.73	.01	.12	.86	.05
なんだかんだ言っても、子どもはかわいい	.05	.65	.01	.15	.77	-.18
子どもの好奇心が旺盛になってきたことを、嬉しく思う	.07	.72	-.01	.02	.77	.02
子どもと一緒にいると、楽しい	-.11	.66	.00	-.16	.76	.07
以前にも増して、子どもとのやりとりが楽しいと感じる	-.01	.75	.02	-.07	.76	.08
うちの子は、「イヤ」と言ったり「じぶんで」主張したりすることが多いので心配だ	-.13	-.14	.80	.01	-.09	.83
うちの子は聞き分けがよすぎるので心配だ	.02	.14	.73	.00	.11	.75
もう少し自己主張をしたらいいのに、と歯がゆくなることがある	.22	.03	.55	.07	.02	.64
		第2因子	第3因子		第2因子	第3因子
因子間相関	第1因子	-.51	-.22	第1因子	-.38	.07
	第2因子		.06	第2因子		-.14

コホート間の得点比較

今回使用した尺度に関しては、子どもが1歳後半である場合と2歳前半である場合とで、得点に差があることが先行研究（坂上, 2003）で確認されている。そのため、コホート間の得点差の検討にあたっては、コホート（C1, C2の2水準）に加え、月齢（低月齢：18～24ヵ月齢、高月齢：25～30ヵ月齢の2水準）も要因に含めた、被験者間二要因の分散分析を行うこととした。なお、サンプル数の大きさと分散分析を頻回に行うことによる第一種の過誤の発生確率を下げるため、有意水準は1%（両側検定）とした。

子どもの反抗・自己主張の程度 反抗・自己主張の程度得点の平均値（標準偏差）は、C1では低月齢群が3.26（.74）、高月齢群が3.42（.73）であり、C2では低月齢群が3.06（.91）、高月齢群が3.51（.90）と、いずれのコホート、月齢群でも、3点台（取りうる得点の範囲は1～5）であった。分散分析の結果、月齢の主効果のみ有意（ $F(1, 555) = 18.13, p = .01, \eta^2 = .03$ ）であり、低月齢群よりも高月齢群で得点が高かった。ただし、効果量は小さかった。

子どもの反抗・自己主張への対応の頻度 コホート別・月齢別に算出した、各対応の頻度の得点の平均値と標準偏差を Table 2 に示す。

まず、各コホートにおいて、どのような対応がよくとられており、どのような対応があまりとられていないのかを把握するため、得点が高かった対応の上位5つと下位5つをみていく。低月齢群での上位5対応は、C1では抱っこ、自尊心に訴える、共感、注意をそらす、指示、C2では抱っこ、自尊心に訴える、共感、注意をそらす、放置であった。このように、上位5つの対応のうち4つは、2つのコホート間で共通していた。また、高月齢群での上位5対応は、C1では自尊心に訴える、抱っこ、共感、指示、注意をそらす、C2では抱っこ、自尊心に訴える、注意をそらす、共感、放置であった。上位の対応については、低月齢と高月齢でも、2つのコホート間でほぼ共通していた。

一方、低月齢での下位5対応は、C1ではアイデンティティに訴える、脅し、交換条件、無理強い、叩く、C2では脅し、アイデンティティに訴える、叩く、突き放す、大声で怒るであった。また、高月齢での下位5対応は、C1では脅し、無理強い、アイデンティティに訴える、叩く、突き放す、C2では叩く、脅し、アイデンティティに訴える、大声で怒る、突き放すであった。下位5つの対応について、2つのコホート間で共通していたのは低月齢群では3つ（アイデンティティに訴える、脅し、叩く）であったが、高月齢群では4つと多くの対応が共通していた。

次に、コホートと月齢を独立変数、各対応の頻度の得点を従属変数とする被験者間二要因分散分析を行った（Table 2）。その結果、18の対応中12の対応で、コホートの主効果が有意であり、共感、自尊心に訴える、大声で怒る、突き放す、指示、叩く、無理強い、飲食物、説諭、抱っこは、C2に比べC1でより頻繁に、また、待つと交換条件は、C1に比べC2でより頻繁にとられていた。なお、大声で怒る、突き放す、指示、叩くについては効果量の大きさが中程度であったが、その他の対応については、効果量は小さかった。

また、18の対応中7つの対応で月齢の主効果が有意であり、大声で怒る、突き放す、説諭、交換条件、脅し、アイデンティティに訴える、物事でつるは、低月齢群に比べ高月齢群でより頻繁にと

られていた。なお、交換条件とアイデンティティに訴えるでは、効果量の大きさは中程度であったが、その他の対応では効果量は小さかった。

さらに、放置でコホートと月齢の交互作用が有意であり、単純主効果検定（Bonferroni法）の結果、C2では、高月齢群が低月齢群に比して子どもを放置する頻度が高かった（ $F(1, 557) = 13.65, p < .001, \eta^2 = .02$ ）。また、高月齢群では、C2の方がC1よりも子どもを放置する頻度が高かった（ $F(1, 557) = 4.56, p = .03, \eta^2 = .01$ ）。

Table 2 子どもの反抗・自己主張に対する母親の対応：平均値・標準偏差と、分散分析（コホート×月齢）の結果

	コホート1 (2000年)		>	コホート2 (2020年)		分散分析結果								
	低月齢 (N=117)	高月齢 (N=144)		低月齢 (N=150)	高月齢 (N=150)	コホートの 主効果			月齢の主効果			交互作用		
	M (SD)	M (SD)		M (SD)	M (SD)	F値	p	η^2	F値	p	η^2	F値	p	η^2
共感	3.96 (0.97)	3.69 (1.05)	>	3.53 (1.08)	3.49 (1.06)	12.68	<.001	.02	2.79			1.67		
自尊心に訴える	3.98 (1.00)	3.93 (0.97)	>	3.61 (1.11)	3.80 (1.05)	8.07	<.001	.01	0.58			1.84		
大声で怒る	2.97 (1.14)	3.38 (1.13)	>	2.29 (1.08)	2.57 (1.15)	59.90	<.001	.09	13.23	<.001	.02	0.51		
突き放す	2.73 (1.11)	3.05 (1.09)	>	2.00 (0.95)	2.62 (1.08)	41.50	<.001	.07	27.61	<.001	.05	2.76		
指示	3.56 (0.90)	3.79 (0.97)	>	2.89 (1.16)	3.19 (1.06)	52.75	<.001	.09	9.34			0.13		
叩く	2.22 (1.06)	2.38 (1.06)	>	1.56 (0.90)	1.72 (0.98)	61.22	<.001	.10	3.57			0.00		
無理強い	2.19 (0.90)	2.26 (0.78)	>	1.97 (0.93)	2.05 (0.97)	7.97	<.001	.01	1.13			0.00		
注意をそらす	3.80 (1.02)	3.78 (1.07)		3.45 (1.10)	3.69 (1.02)	5.88			1.43			2.20		
DVDやTV	3.18 (1.24)	3.01 (1.17)		2.84 (1.22)	2.85 (1.26)	5.83			0.64			0.75		
飲食物	3.06 (1.22)	3.03 (1.12)	>	2.69 (1.13)	2.75 (1.20)	10.71	<.001	.02	0.03			0.18		
待つ	2.72 (1.00)	2.63 (1.00)	<	2.83 (1.10)	3.05 (1.09)	9.25	<.001	.02	0.50			3.06		
説論	3.29 (1.02)	3.72 (0.95)	>	2.82 (1.06)	3.31 (1.04)	25.37	<.001	.04	28.08	<.001	.05	0.16		
交換条件	2.15 (1.19)	2.80 (1.29)	<	2.47 (1.26)	3.04 (1.26)	6.96	<.01	.01	32.46	<.001	.06	0.13		
脅し	1.73 (0.98)	2.06 (1.10)		1.52 (0.83)	2.01 (1.06)	2.38			23.43	<.001	.04	0.79		
アイデンティティに訴える	1.56 (0.88)	2.33 (1.27)		1.55 (0.89)	2.01 (1.24)	3.00			43.44	<.001	.07	2.92		
物事でつる	3.14 (1.13)	3.25 (1.05)		2.88 (1.14)	3.27 (1.08)	1.65			7.17	<.01	.01	2.14		
抱っこ	4.17 (0.89)	3.87 (0.96)	>	3.75 (1.04)	3.85 (1.05)	6.74	<.01	.01	1.35					
放置	3.10 (1.03)	3.08 (1.07)		2.92 (1.06)	3.35 (1.06)	0.20			5.15			6.17	.01	.01

pが空欄の箇所は、 $p \geq .01$

子どもの反抗・自己主張への対応の効果の認知 コホートと月齢別に算出した、各対応の効果の得点の平均値と標準偏差を Table 3 に示す。取り得る得点の範囲は1～4点であったが、C2では、低月齢群、高月齢群のいずれにおいても3点を超える対応は抱っこのみであった。

コホートと月齢を独立変数、各対応の効果の認知に関する得点を従属変数とする被験者間二要因の分散分析（Table 3）の結果、18の対応中13の対応で、コホートの主効果が有意であった。有意であった全ての対応（共感、自尊心に訴える、大声で怒る、突き放す、指示、叩く、無理強い、注意をそらす、DVDやTV、飲食物、説論、アイデンティティに訴える、物事でつる）で、C2はC1に比べ、対応の効果をより低く認知していた。なお、効果量の大きさは、大声で怒る、指示、叩く

については中程度であったが、その他の対応については小さかった。

また、18の対応中2つの対応で月齢の主効果が有意であり、突き放すと交換条件で、高月齢群の母親が低月齢群の母親に比して、対応の効果をより高く認知していた。ただし、効果量はどちらも小さかった。

さらに、抱っこではコホートと月齢の交互作用が有意であり、単純主効果検定（Bonferroni法）の結果、C1では、低月齢群の母親の方が高月齢群の母親よりも、抱っこの効果を高く認知していた（ $F(1, 556) = 8.66, p = .003, \eta^2 = .02$ ）。また、低月齢群では、C2の方がC1よりも、抱っこの効果を低く認知していた（ $F(1, 556) = 9.31, p = .002, \eta^2 = .02$ ）。

Table 3 子どもの反抗・自己主張への対応の効果：平均値・標準偏差と、分散分析（コホート×月齢）の結果

	コホート1 (2000年)		>	コホート2 (2020年)		分散分析結果								
	低月齢 (N=117)	高月齢 (N=144)		低月齢 (N=150)	高月齢 (N=150)	コホートの 主効果			月齢の主効果			交互作用		
	M (SD)	M (SD)		M (SD)	M (SD)	F値	p	η^2	F値	p	η^2	F値	p	η^2
共感	2.95 (0.82)	2.81 (0.84)	>	2.66 (0.73)	2.71 (0.76)	8.08	<.001	.01	0.45			2.15		
自尊心に訴える	3.38 (0.75)	3.19 (0.79)	>	2.90 (0.75)	2.94 (0.78)	31.06	<.001	.05	1.36			3.16		
大声で怒る	2.22 (0.99)	2.28 (0.95)	>	1.63 (0.76)	1.67 (0.77)	67.47	<.001	.11	0.55			0.04		
突き放す	2.06 (0.88)	2.26 (0.90)	>	1.85 (0.80)	2.02 (0.85)	9.90	<.001	.02	6.71	<.01	.01	0.04		
指示	2.38 (0.67)	2.44 (0.70)	>	1.98 (0.81)	1.90 (0.71)	57.20	<.001	.09	0.03			1.24		
叩く	2.12 (1.09)	2.21 (0.95)	>	1.49 (0.69)	1.52 (0.67)	83.07	<.001	.13	0.70			0.14		
無理強い	1.84 (0.86)	1.90 (0.79)	>	1.69 (0.71)	1.65 (0.64)	9.48	<.001	.02	0.04			0.70		
注意をそらす	3.15 (0.71)	3.17 (0.75)	>	2.91 (0.83)	2.91 (0.69)	15.51	<.001	.03	0.03			0.03		
DVDやTV	3.10 (0.87)	2.96 (0.97)	>	2.79 (0.81)	2.76 (0.81)	11.94	<.001	.02	1.47			0.58		
飲食物	3.28 (1.08)	3.30 (0.85)	>	3.00 (0.81)	2.97 (0.85)	16.15	<.001	.03	0.00			0.14		
待つ	2.77 (0.88)	2.54 (0.93)		2.75 (0.73)	2.82 (0.73)	3.26			1.31			4.83		
説諭	2.48 (0.64)	2.56 (0.63)	>	2.31 (0.68)	2.45 (0.69)	6.17	<.01	.01	3.84			0.43		
交換条件	2.15 (1.01)	2.43 (1.16)		2.37 (0.71)	2.51 (0.73)	3.66			7.40	<.01	.01	0.75		
脅し	1.84 (1.22)	2.03 (1.28)		1.83 (0.83)	2.02 (0.82)	0.00			4.55			0.00		
アイデンティティに訴える	1.65 (1.02)	1.85 (1.04)		1.99 (0.66)	1.88 (0.71)	6.70	<.01	.01	0.35			4.58		
物事でつる	3.19 (0.72)	3.16 (0.73)	>	2.94 (0.70)	2.90 (0.75)	17.15	<.001	.03	0.32			0.01		
抱っこ	3.34 (0.74)	3.04 (0.91)		3.03 (0.82)	3.07 (0.81)	3.98			3.52			5.98	<.01	.01
放置	2.61 (0.84)	2.57 (0.87)		2.55 (0.74)	2.63 (0.74)	0.00			0.08			0.82		

pが空欄の箇所は、 $p \geq .01$

育児感情 コホートと月齢別に算出した、各下位尺度得点の平均値と標準偏差を Table 4 に示す。3つの下位尺度のうち、否定的感情の平均得点は3点前後と、取り得る得点範囲（1～5）のほぼ中点に近い値であった。また、肯定的感情の平均得点は4点台前半と、取り得る得点範囲の中では高めの値であり、不安の平均得点は1点台後半と、取り得る得点範囲の中では低めの値であった。

コホートと月齢を独立変数、3つの下位尺度の得点を従属変数とする被験者間二要因の分散分析（Table 4）を行ったところ、否定的感情では月齢の主効果のみが有意であり、高齢群では低月齢群

よりも否定的感情が高かった。肯定的感情については、コホートの主効果が有意であり、C2ではC1よりも肯定的感情が低かった。不安では、コホートと月齢の交互作用が有意であり、単純主効果検定 (Bonferroni法) の結果、C1では、高月齢群の母親の方が低月齢群の母親に比して、より高い不安を有していた ($F(1, 557) = 8.63, p = .003, \eta^2 = .02$)。また、低月齢群では、C2の母親の方がC1の母親に比してより高い不安を有していた ($F(1, 557) = 11.19, p < .001, \eta^2 = .02$)。

Table 4 母親の育児感情：平均値・標準偏差と、分散分析 (コホート×月齢) の結果

	コホート1 (2000年)		コホート2 (2020年)		分散分析結果								
	低月齢 (N=117)	高月齢 (N=144)	低月齢 (N=150)	高月齢 (N=150)	コホートの 主効果			月齢の主効果			交互作用		
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	F値	p	η^2	F値	p	η^2	F値	p	η^2
否定的感情	2.99 (0.81)	3.26 (0.79)	2.99 (0.84)	3.25 (0.81)	0.00			14.96	<.01	.03	0.02		
肯定的感情	4.50 (0.55)	4.45 (0.54)	4.16 (0.76)	4.10 (0.73)	38.04	<.01	.06	1.00			0.02		
不安	1.64 (0.64)	1.92 (0.74)	1.96 (0.85)	1.89 (0.81)	4.69			2.60			7.26	<.01	.01

pが空欄の箇所は、 $p \geq .01$

専業の母親と有職の母親の比較 (コホート2のみ) コホート1では、協力者のほとんどが専業で育児をしている母親であったのに対して、コホート2には専業で育児をしている母親と有職の母親がほぼ同じ割合で含まれていた。専業で育児をしている母親と有職の母親とでは、子どもへの対応や育児感情に違いがある可能性が想定されることから、コホート2についてのみ、両者の比較を行うこととした。対応の頻度と対応の効果に関する項目の得点、ならびに育児感情の下位尺度得点について、母親の職の有無と子どもの月齢を独立変数とする被験者間二要因の分散分析 (有意水準は1% (両側検定)) を行った。分析には、職の有無が不明であった6人を除く294人のデータを用いた。以下には、職の有無の主効果と、職の有無と月齢の交互作用が有意であった結果を記載する。

子どもの反抗や自己主張への対応については、大声で怒ると叩くの2つの対応で職の有無の主効果が有意であり、大声で怒る (専業母 $M = 2.61, SD = 1.19$, 有職母 $M = 2.19, SD = .97$; $F(1, 293) = 10.16, p = .002, \eta^2 = .03$), 叩く (専業母 $M = 1.76, SD = 1.02$, 有職母 $M = 1.47, SD = .76$, $F(1, 293) = 7.05, p = .008, \eta^2 = .02$) のいずれも、有職の母親よりも専業の母親でより頻繁にとられていた。また、飲食物では交互作用が有意であり ($F(1, 293) = 6.82, p = .009, \eta^2 = .02$)、単純主効果検定の結果、専業の母親では、低月齢群よりも高月齢群で有意に得点が高かった (低月齢群 $M = 2.58, SD = .13$, 高月齢群 $M = 2.95, SD = .13$; $F(1, 290) = 4.08, p = .04, \eta^2 = .01$)。ただし、いずれについても効果量は小さかった。

対応の効果については、飲食物で交互作用が有意 ($F(1, 293) = 6.67, p = .01, \eta^2 = .02$) であり、有職の母親では、高月齢群よりも低月齢群で有意に得点が高かった (低月齢群 $M = 3.03, SD = .10$, 高月齢群 $M = 2.73, SD = .10$; $F(1, 290) = 4.53, p = .03, \eta^2 = .02$)。また、高月齢群で、専業の母親の方が有職の母親よりも有意に得点が高かった (専業母 $M = 3.17, SD = .09$, 有職母 $M = 2.73, SD = .10$, $F(1, 290) = 10.41, p = .001, \eta^2 = .04$)。ただし、効果量はいずれも小さかった。その他の対応については、職の有無の主効果、交互作用ともに有意ではなかった。

なお、子どもの反抗や自己主張の程度ならびに育児感情についても、母親の職の有無と子どもの月齢を独立変数とする被験者間二要因の分散分析を行ったが、母親の職の有無の主効果ならびに交互作用はいずれも有意ではなかった。

考察

本研究では、2000年当時に1歳後半から2歳前半の子どもの育てていた母親（コホート1）と、2020年に1歳後半から2歳前半の子どもの育てていた母親（コホート2）に同内容の質問項目を提示し、その回答の比較を行った。具体的には、子どもの反抗や自己主張に対してとられうる代表的な対応を18提示し、その対応を母親がとる頻度と、母親が認知している対応の効果を評定してもらい、コホート間の回答を比較した。また、母親の対応に関連する要因として、子どもの反抗や自己主張の程度と、母親の育児感情についても評定を求め、コホート間の回答を比較した。

分析の結果、2つのコホートの回答には、共通する点もあったが、相違点が多数あることが分かった。以下、何点かに整理をして、結果の考察を行う。

子どもの反抗や自己主張の程度

自己確認期のまっただ中にあたる2歳代前半（高月齢群）の子どもの反抗や自己主張については、両コホートの母親とも、平均値で3.5点程度（取り得る得点の範囲は1～5点）と、同程度の強さであると認知していた。しかし、低月齢群、すなわち、1歳代後半の子どもの反抗や自己主張については、コホート2の母親はコホート1の母親ほど強いものとは認知していなかった。坂上・金丸・六角（武田）（2016）は、親子の自由遊び後の片付け課題での2歳児の行動の経年変化の分析から、おとなからの片付けの要請に対して反抗や拒否を示した子どもの割合が2004・2005年度から2010・2011年度の間に低下し、子どもがより従順な行動を示すようになってきていることを見出している。坂上ほか（2016）の報告は、子どもの行動の観察に基づくものであり、母親の認知に基づく本研究のデータとは、対象とする子どもの年齢に重なりはあるものの若干異なる点もある。しかし、自己の輪郭が明確になるとともに、反抗や自己主張が顕著になる、という変化がこの時期の子どもには生じることに鑑みると、上記の研究ならびに本研究の結果のいずれも、幼児期前半の子どもの自己の発達に遅延が生じている可能性を示唆している、という点で興味深いといえる。

子どもの反抗・自己主張への母親の対応

子どもの反抗や自己主張に対する母親の対応については、まず、コホートごとに因子分析を行ったが、両コホートで同じ因子構造を見出すことができなかった。これは、子どもへの対応に関する意味づけが、20年前と現在の2歳児の母親とでは変化した可能性があることを示唆する。この点について本研究ではこれ以上掘り下げた検討は行わなかったが、今後の課題として、各コホートでの18の対応の因子分析の結果とあわせて、母親がどのような理由や意図で個々の対応をとったりとら

なかったりするの、また、個々の対応についてどのように考えているのかを、インタビューなどの手法を用いて明らかにしていくことが必要である。

次に、子どもの反抗や自己主張への母親の対応のうち、頻度が高かった上位5つと、頻度が低かった下位5つについて、考察を行う。まず、上位5つの対応については、両コホートで同じ対応が4つ(抱っこ、自尊心に訴える、共感、注意をそらす)、含まれる結果となった。抱っこ(抱っこをしたり抱きしめたりする)、自尊心に訴える(「すごいね」「偉いね」などと誉めて乗せる)、共感(「～したい」「～がいやなの」と共感の言葉をかける)はいずれも、子どもの気持ちに寄り添おうとする共感的な関わりである。子どもから反抗や自己主張を向けられたときでも、親は、アタッチメントの対象としての機能を果たすべく関わっていることがこの結果からはうかがわれる。また、注意をそらす対応は、子どもの泣きやぐずりに対して親が用いるもっとも一般的な対応とされ(Verhoeven, et al., 2019)、この結果も上記の解釈に符号するものである。一方、上位5つの対応のうち、両コホートで異なっていた対応は、指示(「～しなさい」「～したらいけません」と叱る)と放置(しばらくそのまま放っておく)であった。コホート1でのみ上位に入った対応である指示は、規範やルールを伝えるべく、子どもと積極的に関わろうとする対応であり、子どもの行動を構造化することに役立つ対応である。一方、コホート2で上位に入った対応である放置は、子どもと関わりをもつのを一時的にやめる、という対応である。このように対照をなす2つの関わりがそれぞれの上位に入っている点は、興味深いといえる。

下位の対応では、アイデンティティに訴える(「もう赤ちゃんじゃないよね」「おにいさん(おねえさん)は～ですよ」などと言いかせる)、脅し(子どもが苦手な物やいやなことで脅す)、叩く(手やお尻を叩く)が、いずれのコホート、月齢群でも下位5つの中に含まれていた。アイデンティティに訴える対応は、この年代の子どもの認知面や言語面の発達水準を踏まえると、子どもがその意味を理解するにはやや難しい内容の対応であると考えられるため、とられる頻度が低いものと推測される。これに対して、脅しや叩く、また、両コホートのいずれかの月齢群で下位にある、突き放す、大声で怒る、無理強いするといった対応は、親の権力を強制的に行行使する、力の行使(power assertion; Hoffman, 1960)と呼ばれる対応にあたる(Baumrind, 2012)。力の行使は、子どもの従順さを低め、社会面や認知面の発達に負の影響を与えることが実証的にも示されている(たとえば、Berlin et al., 2009; Laurin & Joussemet, 2017; Vittrup et al., 2006)。これらの対応は子どもの発達に好ましくない影響をもたらす可能性があるという情報を、インターネットの育児サイトや育児・教育雑誌、育児に関するテレビ番組などから得ている母親は少なくないものと推測される。また、これらの対応については、対応の効果に関する認知の平均点が1点台であるものが多く、母親たちは、子どもに言うことを聞かせたり子どもを落ち着かせたりするうえで、これらの対応にそれほど効果があるとは考えていなかった(Table 3)。このような理由から、力を行行使する対応は他の対応に比べ、あまり利用されていなかったものと思われる。

以上のように、各種対応の中でもよくとられる対応とそうではない対応に注目した場合、2つのコホートには共通する点が多くあった。しかし、個々の対応の頻度を比べた場合、コホート2の母親は、コホート1の母親に比べ、多くの対応でその頻度が低いことが明らかとなった。コホート間

で頻度に有意差がみられなかった対応は、注意をそらす、DVDやTVを見せる、好きな物事でつるといった、問題となっている事態から他のことへと子どもの気をそらす対応と、脅し、アイデンティティに訴えるという対応であった。なお、脅しとアイデンティティに訴える対応は、いずれのコホートでも頻度が低い対応であった。一方、頻度に有意差がみられた対応の中では、大声で怒る、突き放す、叩くといった、力の行使にあたる対応の効果量が相対的に大きかった。厳しく強制的なしつけ方法は、他のしつけの方法がうまくいかないときや、子どもや母親がコントロールを失ったときの最後の手段として使われることが多いとされる (Vittrup et al, 2006)。母親の否定的育児感情の高さには、2つのコホートで差がなかった (Table 4) ことを踏まえると、現在、幼児を子育て中の母親は、20年前の母親に比べると、子どもの前で感情的になったりコントロールを失ったりすることが少なく、穏やかに子どもに関わっているものと推測される。この結果だけを見ると、子どもに対する親の関わりは、この20年の間に好ましいとされる方向へ変化しているように思われる。

しかしながら、他の対応や対応の効果の認知におけるコホート間の違いもあわせて、親の関わりの変化について考えてみると、上述のこととはやや異なる特徴が浮かびあがってくる。大声で怒る、突き放す、叩くという対応以外で、コホート1よりもコホート2で頻度が低かったのは、共感、自尊心に訴える、抱っこ、説諭 (理由や状況を説明して言い聞かせる) といった対応であった。最初の3つは、子どもの気持ちに寄り添おうとする共感的な対応にあたり、中でも共感や抱っこは、子どもから親へのアタッチメントの形成を支える、重要な関わりであるといえる。安心感を得るうえでアタッチメント対象への接触が重要であるとされる1歳台 (低月齢群) において、抱っこの頻度や効果に関する認知がコホート2では低くなっているという結果は、懸念される点である。また、説諭は、子どもの視点を考慮して情報提供や指導を行う誘導的なしつけに類するものであり、誘導的なしつけは規範の内在化を促すうえで有効とされる (Choe, Olson, and Sameroff, 2013)。コホート2では、説諭の頻度と指示の頻度もコホート1より低かったが、これは、子どもが規範を内在化するうえで必要とされる行動の枠組みを伝えるための関わりが希薄になりつつあることを示唆する。坂上ら (2016) による、2歳児親子を対象とした観察研究でも、親子でのおもちゃの片付け場面で、子どもに対して片付けをすべき理由や状況を説明した母親の割合は、2004・2005年度から2010・2011年度の間に低下したことが報告されており、説諭に類する親の関わりが少なくなっているという本研究の結果も、これと符号するものである。

一方、コホート1よりもコホート2で頻度が高かったのは、待つ (子どもがその気になるのを待つ)、交換条件といった対応であった。また、放置については、子どもの反抗や自己主張がより強くなる高月齢群でのみ、コホート2の方がコホート1よりも高いことが確認された。待つも放置も、子どもの自主性に任せる対応と捉えることができる。また、交換条件も、子どもに行動の選択をさせている、という意味では、そのように捉えることができるかもしれない。しかし、親があきらめて子どもとの関わりを放棄してしまう場合にも、待つや放置といった対応はとられうる。

そこで、各対応の効果に関する認知に目を転じてみると、コホート2では、18の対応のうち14の対応で、対応の効果がコホート1よりも低く見積もられていた。つまり、コホート2の母親はコホート1の母親に比べ、子どもの反抗や自己主張に対処するうえで、何とかやっている、うまく関われ

ている、という実感を持ちづらくなっているものと思われる。

以上の結果を総合的に解釈すると、現在、幼児を子育て中の親は、20年前の親に比べ、様々な対応を駆使して試行錯誤で子どもに向き合うことが難しくなっており、親としての効力感をもちづらくなっているのではないかと推察される。この時期の子どもの自律性の育ちを支えるうえで、親には、アタッチメントの対象として子どもに対して敏感に応答することと、子どもの自己コントロールの育ちを促すべく、社会化の担い手として行動の枠を示し、子どもと交渉したり子ども自身に考えさせる機会を設けたりすることの両方が求められる (Verhoeven, et al., 2019)。翻って、現在、幼児を子育て中の親では、20年前の親に比べ、子どもから反抗や自己主張を向けられた時に、子どもに対して強圧的に関わることは少なくなったが、同時に、子どもを抱っこすることや、子どもに共感の言葉をかけること、また、行動の枠を明確に示すこと（本研究で扱った対応の中では、指示や説諭がこれに相当する）も少なくなっており、子どもとあえて積極的に関わらない（待つ、放置といった対応）ことが相対的に多くなったといえる。子どもの発達にともない親として果たすべき役割が増えるのが歩行開始期であるが、この時期に親が親としてうまく機能していくためには、わが子の変化に応じて親の側が、かかわり方のレパートリーを増やしていくことが求められる (坂上, 2005; Verhoeven, et al, 2019)。しかし、今回の調査で見出された母親の関わりの変化からは、そうした親としての発達がかつてよりも難しくなっている可能性が示唆される。子どもと向き合うことを妨げる複数の要因や状況（たとえば、冒頭で述べた、親になる前の、子どもや子育てについての体験的な学びの少なさや、アウェイ育児の状況など）が、それを困難にしているのではないかと推測する。

母親の育児感情 本研究では、自己主張期にあたるこの時期に特化した内容の質問項目を独自に作成し、母親の育児感情の測定を行った。因子分析によって確認された、育児感情を構成する3つの因子のうち、子どもの反抗や自己主張への苛立ちや困惑を含む否定的育児感情については、コホート間で差はなく、いずれのコホートでも子どもの反抗や自己主張が本格化する2歳台の前半にかけてその程度が強くなることが確認された。

一方、子どもの成長の姿や子どもとのやりとりに対する肯定的感情は、コホート2でコホート1よりも有意に得点が低く、効果量も中程度であった。コホート1では、肯定的感情の平均値が4.5点前後（取り得る得点の範囲は1～5点）であったのに対し、コホート2では平均値が4.1点前後であった。このことから、現在幼児を子育て中の母親は、20年前の母親に比べ、子どもの成長や子どもとのやりとりに対してそこまで高い肯定的感情を有していないといえる。

また、子どもが過度に従順であることや子どもの反抗や自己主張の少なさへの不安については、低月齢群でのみ、コホート2の母親の方がコホート1の母親よりも高いことが明らかとなった。そこで、子どもの反抗や自己主張が少ないと認知している母親の方が、実際に高い不安を有しているのかどうかを確かめるべく、子どもの反抗・自己主張の程度と母親の不安の相関係数を算出してみたところ、コホート2における両者の相関は $r = -.02$ であった。つまり、母親の不安は、実際の子どもの反抗や自己主張の程度とは無関係に生じているものであると考えられる。なお、コホート1では、両者の関連は $r = -.34$ と、母親の不安は、実際に母親が認知している子どもの反抗や自己主張の弱

さと結びついたものであった。現在では育児に関する情報が溢れており、なおかつそれを誰もが容易に入手できるため、親はわが子に実際の発達的な変化が生じる前から、これから生じる発達的な変化について、様々な情報に触れることになる。そうしたことが、わが子の実際の様子とは結びついていない予期的な不安を、母親に生じさせてしまっているのではないかと推測される。

「自己確認期」にある子どもをもつ現代の親に望まれる支援とは

本研究の結果からは、現在、幼児を子育て中の母親は、20年前の母親に比べると、様々な対応を駆使して試行錯誤で子どもに向き合うことが難しく、親としての効力感をもちづらくなっていることが示唆された。対応面に関する変化のみから推察すると、現在、子育て中の母親は、一見すると穏やかかつ上手に子どもに関わっているように見えるが、実際には、子どもの発達にともない親として求められる役割が増えたことにうまく適応しきれていないようにも思われる。このことは、子どもの発達や育児に関する情報は溢れていても、アウェイ育児という言葉にあるように、人との繋がりが乏しい中で子育てをしなければならない、という、昨今の母親たちが置かれた状況と無関係のことではないと著者は考える。子育てにおいて、様々な人からの支えや手助けがない、余裕のない状況は、親がゆとりを持ってわが子と向き合うことを難しくする。1歳代後半の子どもを持つ母親において、子どもの反抗や自己主張の少なさに対する母親の不安が、子どもの実際の様子とは無関係であったことや、アタッチメントの形成において重要である抱っこの頻度や効果についての認知が低下していることを踏まえると、特に1歳代の子どもをもつ母親への支援を手厚くする必要があるだろう。また、大声で怒る、叩くといった対応の頻度が、有職の母親よりも専業の母親で高かったことから、専業で育児をしていて、子どもが未就園である母親への支援も重要であるといえる。

現在、子育てをしている母親にとって必要であるのは、子どもの発達のプロセス（見通し）や、子どもの行動の意味についての知識ももちろんであるが、子どものへの関わり方（子どもへの応答や共感の仕方、遊び方など）のさりげないモデルを示してくれる人、子どもの行動や表情の背後にある思いを翻訳して伝えてくれる人、子どもの成長とともに面白がり、喜んでくれる人、育児に悩んだときに、親が自身で考え、わが子との関わりの中で答えを見出すプロセスに寄り添ってくれる人、親としての努力や親として毎日当たり前のようにやっていることを認めてくれる人、時に親がひとりで過ごすための時間を作ることに協力してくる人、こうした人たちの支えなのではないだろうか。このようにさまざまな形で子育てに伴走してくれる人たちがいることが、親に子どもと向き合う余裕や親としての手応えをもたらし、わが子の行動の捉え方や、わが子への関わり方を豊かにすることを促すのではないかと著者は考える。

本論では、質問紙調査の手法を用いて、現代の母親における子どもの反抗・自己主張への対応の仕方の特徴と、子どもの「自己確認期」への向き合い方を探ってきたが、本論の限界として、その背景にある理由や状況については、あくまで推測の域を出ていないことを指摘できる。今後は、母親へのインタビュー調査などの質的方法を用いることによって、子どもの自己確認期を母親がどのように経験しているのかを母親の内的視点から探り、親としての発達過程が現代においてはどのようなものになっているのかを明らかにすることが必要である。それによって、自己確認期にある子

どもの発達や親の発達を支えるうえでどのような支援が望まれるのかをよりの確に見定めていくことが可能になるであろう。

脚注

¹ SPSSでは効果量として偏 η^2 が算出されるため、 η^2 のみ別途計算した。

文献

Andreidakis, E., Joussemet, & Mageau, G.A. (2019). How to support toddlers' autonomy: Socialization practices reported by parents. *Early Education and Development*, 30:3, 297-314.

ベネッセ教育総合研究所 (2016). 第5回 幼児の生活アンケート レポート [2016年]
<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail.php?id=4949> (2022年1月25日閲覧)

Baumrind, D. (2012). Differentiating between confrontive and coercive kinds of parental power-assertive disciplinary practices. *Human Development*, 55, 35-51.

Berlin, L. J., Ispa, J. M., Fine, M. A., Malone, P. S., Brooks-Gunn, J., Brady-Smith, C., et al. (2009). Correlates and consequences of spanking and verbal punishment for low-income white, African-American, and Mexican American toddlers. *Child Development*, 80, 1403-1420.

Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss. : Vol.1 Attachment*. New York: Basic.

Choe, D. E., Olson, S. L., and Sameroff, A. J. (2013). The interplay of externalizing problems and physical and inductive discipline during childhood. *Developmental Psychology*, 49, 1-21.

Emde, R. & Bachsbaum, H.K. (1990). "Didn't you hear my mommy? Autonomy with connectedness in moral self emergence. In D. Cichetti, & M. Beeghly. (Eds.), *The self in transition: Infancy to childhood* (pp.35-60). Chicago: The University of Chicago Press.

Forman, D. R. (2007). Autonomy, compliance, and internalization. In C. A. Brownell & C. B. Kopp (Eds.), *Socioemotional development in the toddler years: Transitions and transformations* (pp. 285-319). NY : The Guilford Press.

Gralinski, H. J., & Kopp, C. B. (1993). Everyday rules for behavior: Mothers' requests to young children. *Developmental Psychology*, 29, 573-584.

Hoffman, M.L. (1960). Power assertion by the parent and its impact on the child. *Child Development*, 31, 129-143.

金丸智美・坂上裕子・武田(六角)洋子(2014). 2歳児母子のやりとりの変化: 2004・5年と2010・11年の比較 (1) —母子遊び場面に着目して—. 日本発達心理学会第25回大会論文集, 379.

Kochanska, G., Aksan, N., Prisco, T. R., & Adams, E. E. (2008). Mother-child and father-child mutually responsive orientation in the first 2 years and children's outcomes at preschool age: Mechanisms of influence. *Child Development*, 79, 30-44.

Kuczynski, L., Kochanska, G., Radke-Yarrow, M., & Girnius-Brown, O. (1987). A developmental interpretation of young children's noncompliance. *Developmental Psychology*, 23, 799-806.

- Laurin, J.C., & Joussemet, M. (2017). Parental autonomy-supportive practices and toddlers' rule internalization: A prospective observational study. *Motivation and Emotion*, 41, 562-575.
- NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 (2015). 詳解 地域子育て支援拠点ガイドラインの手引 第3版 子ども家庭福祉の制度・実践をふまえて 第3版. 東京: 中央法規出版
- 坂上裕子 (2002). 歩行開始期における母子の葛藤的やりとりの発達的变化: 一母子における共変過程の検討. *発達心理学研究*, 13, 261-273.
- 坂上裕子 (2003). 歩行開始期における, 子どもの反抗・自己主張に対する母親の対応: 子どもの月齢, 出生順位, 発達の変化との関連. *帝京大学心理学紀要*, 7, 59-78.
- 坂上裕子 (2005). 子どもの反抗期における母親の発達: 歩行開始期の母子の共発達過程. 東京: 風間書房
- 坂上裕子・金丸智美・武田 (六角) 洋子 (2016). 片付け課題における2歳児の従順行動・不従順行動の経年変化: 2004・2005年度と2010・2011年度の比較から. *発達心理学研究*, 27, 368-378.
- 坂上裕子 (2018). 「イヤイヤ期」再考 (特集 反抗期再考) *教育と医学*, 66 (12), 1068-1075. 慶應義塾大学出版会
- 菅野幸恵・岡本依子・青木弥生・石川あゆち・亀井美弥子・川田学・東海林麗香・高橋千枝・八木下 (川田) 暁子 (2009). 母親は子どもへの不快感情をどのように説明するか: 第1子誕生後2年間の縦断的研究から. *発達心理学研究*, 20, 74-85.
- 高濱 裕子・渡辺 利子・坂上 裕子・高辻 千恵・野澤 祥子 (2008). 歩行開始期における親子システムの変容プロセス: 母親のもつ枠組みと子どもの反抗・自己主張との関係. *発達心理学研究*, 19, 121-131.
- 氏家達夫. (2001). 親になるプロセスと親であることへの習熟化. *助産婦雑誌* 55 (9), 763-767
- Ujiie, T. (1997). How do Japanese mothers treat children's negativism? *Journal of Applied Developmental Psychology*, 18, 467-483.
- Verhoeven, M., Junger, M., Van Aken, C., Deković, M., and Van Aken, M. A. G. (2007a). Parenting during toddlerhood: Contributions of parental, contextual, and child characteristics. *Journal of Family Issues*, 28, 1663-1691.
- Verhoeven, M., van Baar, A. L., & Deković, M. (2019). Parenting toddlers. In M. H. Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting: Children and parenting* (pp. 56-80). Routledge/Taylor & Francis Group.
- Vittrup, B., Holden, G. W., and Buck, J. (2006). Attitudes predict the use of physical punishment: A prospective study of the emergence of disciplinary practices. *Pediatrics*, 117, 2055-2064.